

アグリフードEXPOオンライン開催報告 農水産業者・食品製造業者173が出展

日本公庫は2020年11月2日から21年3月31日の約5カ月間、国産農水産物をテーマとした展示商談サイト「アグリフードEXPOオンライン」をインターネット上に開設しました。

出展者とバイヤー双方に好評だったのは、運営事務局による「コンシェルジュサービス」です。運営スタッフが出展者とバイヤーの皆さまをつなぐ「コンシェルジュ」となり、成約に向け、次のようなきめ細かいサポートを実施しました。

- 出展者ページに掲載する動画の作成支援
- 出展者とバイヤーのやり取りを仲介
- バイヤーに対し出展商品情報やサンプルを定期的に提供
- 出展者に対しバイヤーが探している商品などを定期的に案内
- 成約に至らなかった場合、その理由などを出展者へフィードバック

出展状況を見ると、業種別では6次産業化に取り組む農業者や食

品製造業者が多く(図1)、幅広い地域からの出展がありました(図2)。

また、バイヤーから出展者に対する引き合いは391件(出展者130先)となりました(図3)。

4月23日時点において引き合い件数の約8割の291件(同113先)が商談を実施。商談件数のうち47件(同29先)が成約となりました。

業種別のバイヤーとの商談件数は、商社、小売業、通信販売・宅配業者との件数が多く、成約率は小売業者との商談が他業者との商談に比べ高くなりました(図4)。果ごもり消費の拡大を背景とした小売業者の購買意欲の高さが伺えました。

出展商品別の成約件数では、菓子、果樹、野菜の順に多く、菓子は主に小売業者と、果樹は通信販売・宅配業者との成約が多くなりました(図5)。

ご出展、ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました。

【出展状況】

図1 業種別

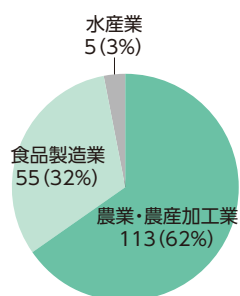
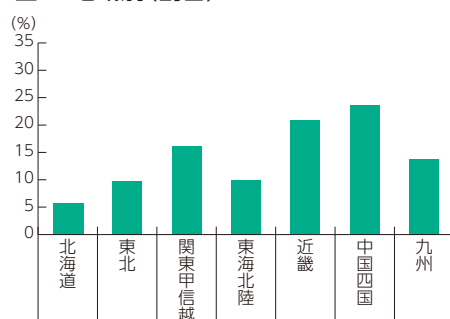


図2 地域別(割合)



【開催概要】

- 名称 ▶ アグリフードEXPOオンライン
～国産農水産物の展示商談サイト～
- 会期 ▶ 2020年11月2日～2021年3月31日
- 出展料 ▶ 月額11,000円(税込)
- 主催 ▶ 株式会社日本政策金融公庫
- 運営 ▶ エグジビションテクノロジーズ株式会社

【商談実施状況】

図3 商談・成約件数

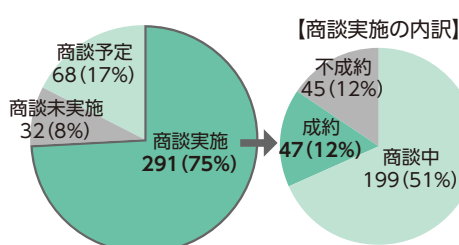


図4 商談件数と成約率(バイヤー業種別)

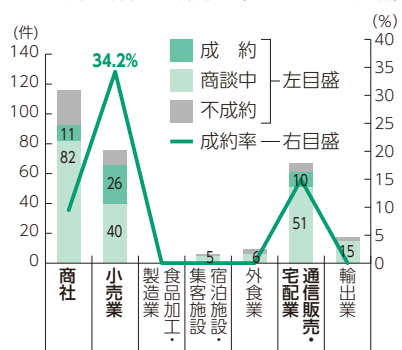
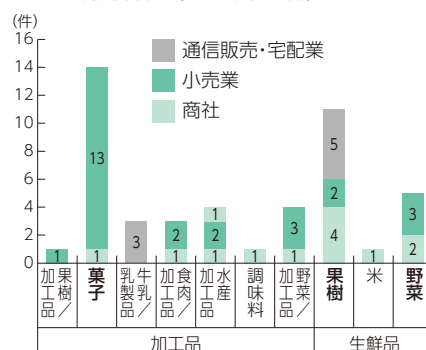


図5 成約件数(出展商品別)





各分科会の報告では活発な意見交換がおこなわれました

佐賀支店発

地元金融機関の連携による 地域支援をスタート

「地域発展ネットワーク会議」(白石町)を開催。この会議は佐賀県内の地域農業支援のため、日本公庫、佐賀銀行、JAバンク佐賀が立ち上げたものです。農業経営者、役場、商工会などと連携しています。

席上、「6次産業化」「新規就農」「観光」の分科会で各テーマの課題や解決策を検討した後、発表がなされました。

公庫が幹事を務める「6次産業化分科会」では、今後、販売戦略セミナー、Web模擬商談会、さまざまな分野の専門家との個別相談会などを実施していきます。

3月8日、於：白石町、参加者：22人

帯広支店発

6カ所の会場をつなぎオンライン事業承継セミナー

多くの農業経営者が抱える「事業承継」の課題解決支援として、セミナーを開催しました。池協会計事務所(札幌市)の上級農業経営アドバイザーで中小企業診断士の工藤秋一氏が講師となり、事業承継の取り組みは早い段階から始めることが重要であることや株式移譲の注意点など円滑な事業承継のポイントの説明がありました。

当日は、公庫支店を本会場に、釧路や根室エリアに設けた5つの農協サテライト会場にライブ配信しました。

開催にあたっては、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、



講師のいる本会場(上)と農協サテライト会場の様子(下)

密を避けること、セミナー会場まで往復200キロメートル以上の移動を要する参加者がいること、さらに移動やセミナーの時間が酪農の搾乳作業時間と重なることなど、多くの課題がありました。オンラインをフル活用することで、コロナ下にもかかわらず、釧路と根室の農業経営者など40人の方に参加していただくことができました。

サテライト会場の参加者からは、「参考になるセミナーに効率的に参加でき、とてもよかった」との声が聞かれました。

3月16日、於：釧路支店を本会場にオンライン開催、参加者：40人

Microsoft Teamsによる オンライン面談をご利用ください

日本公庫農林水産事業では、新型コロナウイルス感染症の拡大防止や、遠方にお住まいなど対面での面談が難しいお客さまのニーズにお応えするため、Microsoft Teamsによるオンライン面談を導入しました。

お客さまと同じ画面を見ながらお話しすることができ、次のような場面でご利用いただけます。

- 資金のご相談の際に、資料を画面にお示ししながら資金制度をご案内する。

- 事業計画などの画面を見ながらお客さまの経営状況を伺い、計画の作成をお手伝いする。

- 財務診断や経営課題見える化シートなどを見ながらお客さまに話を伺い、診断結果をフィードバックする。

このほか、ライブ配信機能を活用することで、ご自宅などから公庫主催のイベントやセミナーにも参加していただくことも可能です。

オンライン面談のお申し込みや詳しい説明をお知りになりたい方は、最寄りの支店までお気軽にお問い合わせください。

ご意見・ご感想をお寄せください

AFCフォーラムは農林漁業者、食品事業者の皆さまに役立つ誌面づくりをめざしています。参考になった記事、取り上げてほしい企画、お気付きの点など、どのようなことでも結構ですので、メール、FAX、電話、郵送により編集部までお寄せください。薄謝を呈します。

メール anjoho@jfc.go.jp

※こちらのコードもお使いください →



FAX 03-3270-2350

電話 03-3270-2268

郵送 〒100-0004

東京都千代田区大手町1-9-4

日本公庫農林水産事業本部情報企画部

AFCフォーラム編集部あて

(福岡県岡垣町 岸本 純子)

◆3月号(特集:検証、東日本大震災から10年)を拝見しました。「観天望気」で、作家の五木寛之さんが成長から成熟の時代へと綴られていました。

時代は確かに豊かになりました。今、お金さえ出せばあらゆるものがそろいます。しかし、「農業生産力」は国が持つておかねばならないものだと感じています。国と国との事情で食料があたかも石油のように厳しく取り引きされる時代が来たら、われわれはどうなるのでしょうか。

そんな時代にならないように、そして国土が緑であふれるように、これからも農林水産業の発展を祈っております。

(広島市 内 惻)

◆本誌3月号で、東北の人たちの不屈の心はたくましいと思った。あれから10年、まだ完全に復旧したわけではなくとも、着々と復興を進展させたのはすばらしい。それが本号の記事の隅々から、ストレートに伝わってきた。国や金融機関など、関係機関の手厚いサポートもあったと思われる。なかでもホッとさせられたのが、「農と食の邂逅」の宮城県美里町の伊藤恵子さんの明るい表情だ。菜園レストランを起しながら大震災に遭い、避難所への弁当配達で奔走、今も食堂、加工、農業と多方面で頑張っているのが頼もしい。彼女の明るい表情を見ると、こちらの気持ちも明るくなる。

AFCフォーラム 2021.6

編集

前田 美幸 平野 伸介 高雄 和彦
山本 晶子 大谷 香織 城間 綾子
竹中 夕美

編集協力

青木 宏高 村田 泰夫

発行

株式会社日本政策金融公庫
農林水産事業本部
〒100-0004
東京都千代田区大手町1-9-4
大手町フィナンシャルシティ ノースタワー
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ https://www.jfc.go.jp/

印刷 佐伯印刷株式会社

販売

株式会社日本食糧新聞社
〒104-0032
東京都中央区八丁堀2-14-4 ヤブ原ビル
Tel. 03(3537)1311
Fax. 03(3537)1071
ホームページ
http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

定価 523円(税込)

編集後記

◆新年度に入り誌面をリニューアルしました。新連載は、ジェット口へ向中の公庫職員をはじめとした海外駐在者による現地食事情エッセイ「ぶらり食探訪」と、農に関する俳句エッセイ「俳句が告げる季節」です。

また「農と食の邂逅」新・農業人は1頁増やし、写真を多く掲載します。皆さま、引き続きのご愛顧をよろしく願います。

(平野)

◆「変革は人にあり」にご登場いただいた涌井さん。「海外を含め少しでも多くの人に自社米を食べてもらいたい。大手と競合しても、バックご飯で勝負する」とのお話に、食べてもらえれば、海外でもその良さはご理解いただける、との自社米に対する絶大な自信を感じました。先を読み、自社米の消費拡大に奮闘する「魂の経営」をぜひ一読ください。

(高雄)

◆新しく編集チームに加わり、二人の女性農業者を取材させていた、機会に恵まれました。自分の「やりたこと」について考え抜き、周囲を巻き込んで実行するお二人の姿を見て、同世代の私は襟が正される思いでした。お二人のように、日々現場で奮闘されている全国の皆さんに、役立つ情報を多くお届けできるよう、頑張っていきます。

(大谷)

◆特集1「輸出促進に向けた物流改革」の編集を担当しました。昨年の8月号で、サツマイモ輸出に取り組む鹿児島県の生産者の方が、輸出促進策について、「産地に近い港から輸出ができるようになれば、輸出は格段に伸びる」と力説されていたことを思い出しました。さて、今号表紙の帯の色は初夏の水を連想させる淡い青、薄浅葱です。

(城間)